

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

56

私は住田町の有住中学校に在勤中、七回の五葉山全校登山を体験している。

有住中学校「沿革史」によると――

- 一、昭和五十九年七月二十五日、赤坂峠登山口(晴)
- 二、六十年七月三日、赤坂峠(晴)
- 三、六十二年七月二十一日、松山登山口(晴)
- 四、六十二年五月二十八日、松山(雹、雨、風、霧)
- 五、六十三年六月三十日、松山
- 六、平成元年七月七日、松山(快晴)
- 七、二年七月六日、松山

とある。

《五》五葉山初登頂、感無量手を握り合う姿、そこち――初体験の感慨は格別なものがあるのである。そこち――

談笑の輪が広がる。五十九年度はそれぞれの体力に応じてA、B、Cの三班に分け、十五分ずつのハンディをつけて出発させた。

《葉》洋々たる起伏の草原、洋々たる遠望の海原、まぶしき絶景――「晴れ」の日の山頂には「観る」べきものが多い。

適期に目にするのは難しいシクナゲの群落。そして、長い長い年月の自然の営みが生んだ原生林のトンネル。永遠に朽ち

ることのないことを願う。素晴らしいオプジェがある。

《山》さんさん降り、雷降り風激し、難波ぎ、瞬時に晴れ間に昼餉(ひるげ)を急ぐ――六十二年五月二十八日。初めての松山コースなので、紺野操さんと紺野寿美さんを

導いてくれたのである。素晴らしいオプジェがある。東の間の晴天を喜び、急いで昼食をすました。雨の中下山となった。下山時刻の遅れを気に遣って、紺野富雄さんが帰路の林道まで登って来てくれた。

なんと有難く、せつ

有住中の五葉山全校登山

住田町上有住 佐熊 位

ガイドをお願いし、男生徒と女生徒に四十分のハンディをつけて出発した。

林道から登山道に入っ

て間もなく雪に襲われ、激しい雨と風の中を突き進んだ。黒岩付近は小降り

の状態が続き、頂上近くになって晴れ間が見え始め、一天雲をかき散らし、なんと晴天が、私たちを頂上地点に迎え入れ

徒を下山させてから引き返し、隊列に追いつくという健脚を見せてくれた。

《校》紅顔と笑顔の少年少女なり、欣喜雀躍(きんきじやくやく)山頂に立つ――平成元年七月七日、学校日誌に「快晴」と記されている。七回に一度の巡り合わせである。

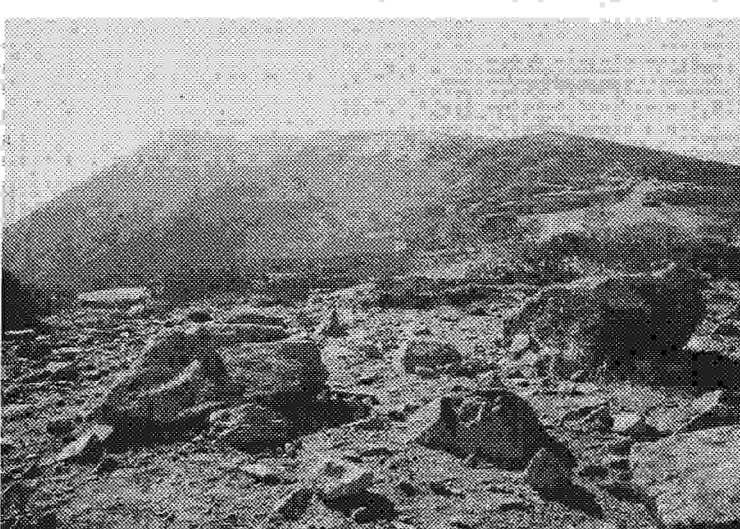
《登》解き放つ男子生徒の出番なり、草駄天走

浄土庭園と称え――戦後の杉の植林ブームで、広葉樹林は里山から姿を消している。深山で見る初夏の新緑は絶品である。手前勝手に「浄土庭園」と呼び名をつけて、ひとり悦に入ったことであつた。

生涯忘れることのできない思い出を持つことは良いことである。思い出とともに心温かい人との絆が想い起こされる

からである。【執筆者プロフィール】一九三一年生まれ、住田町上有住在住。公立中学校教員を定年退職後、町バレーボール協会長、町体協会長、上有住小学校区コミュニティ推進委員長、同地区公民館長を歴任。現在、同地区サン・ヨブ・トークの会長、同地区伝統的生活技術を伝える会事務局、音声訳ボランティアりほん会員。

エッセイ



五葉山頂上部の日枝神社前から黒岩を望む